

小児がん患者・家族に対する新たなサポートシステムおよびケア方法の開発研究

申請者：名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学分野 教授 明智龍男

共同研究者：名古屋市立大学大学院医学研究科 精神腫瘍学分野 博士課程 津村 明美

名古屋市立大学病院 臨床心理士 伊藤 嘉規

1. 研究目的

がん治療の進歩により、小児がん患者の70%は治癒が見込めるまでに至っている。こどもががんに罹患すると、患者のみならず、その家族の成員全員が危機的状態に陥る。小児がん患者の親が経験するストレスは、患者のニーズへの対応、変化する家族生活への対処、経済的問題、精神的苦痛など、多岐にわたる。なかでも母親の精神的苦痛は、最も頻度が高く深刻である。小児がん患者の家族の良好な適応は、患者のQOLにも影響するため、より早期から家族への適切な支援が求められている。欧米では、小児がん患者の診断後早期から支援を必要とする対象を、スクリーニングツールを用いて早期発見し、構造化された心理社会的介入を提供することで、精神的苦痛の軽減、心理社会的問題による家族の社会的不適応状態の改善、QOL向上などにおいて効果をあげている。しかしながら、わが国における小児がん患者の主介護者の精神的苦痛の実態は明らかになっておらず、心理社会的支援を必要とする対象の把握、効果的なサポートやケアの開発を行う上での知見は極めて限られている。

そこで本研究では、小児がん患者の主介護者である母親における、抑うつや不安などの精神的苦痛の頻度および、これらの関連/予測要因を明らかにする。これらをもとに、小児がん患者・家族に対する介入プログラムの枠組みの考案とともに、心理社会的問題のスクリーニングツールの開発を行う。

2. 研究方法

1) 研究1：診断早期の小児がん患者の主介護者の精神心理的苦痛の実態と関連要因探索

診断早期の小児がん患者の主介護者である母親300名を対象に、自記式質問票を用いて3時点（診断後1ヶ月以内・6ヶ月後・1年後）で評価する前向きコホート研究を行う。

抑うつ（Patient Health Questionnaire 9：PHQ9）をアウトカムとして、その発生率を明らかにする。次いで、先行研究から予測される、心理的外傷、ソーシャルサポート、問題解決能力、家族機能、患者のQOL等と抑うつとの間にある関連を分析し、その結果から介入プログラムの枠組みを考案する。

2) 研究2：Psychosocial Assessment Tool（PAT）日本語版の開発

米国で小児がんの診断後早期から心理社会的リスクを抱える患者・家族をスクリーニングするために開発されたPsychosocial Assessment Tool（PAT）の日本語版の信頼性・妥当性を検討する。定められた翻訳ガイドラインに則り作成された日本語版を、研究1と同様の対象者100名に計量心理学的検討のためのPAT日本語版を含めた自記式質問紙調査を行う。

3. 結果および進捗状況

1) 研究1

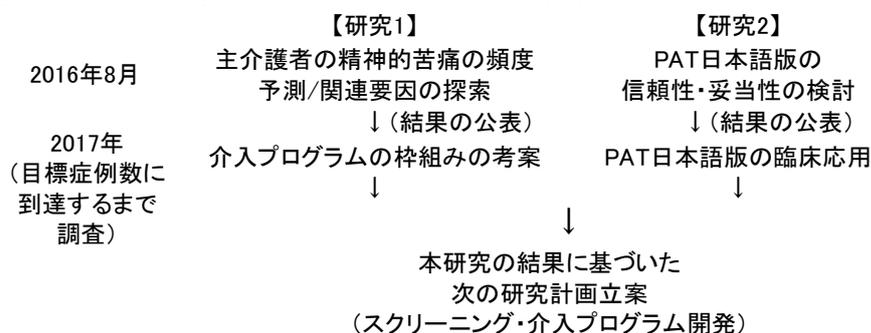
先行研究のレビューを行い、質問票を作成を完成し、研究デザインを決定した。同時に、多施設協同調査のためのフィールドの確保、各施設における IRB 審査などの準備を行ってきた。質問紙調査の対象者は研究2と一部重複するため、2015年度は、研究1に先立って、研究2のPAT日本語版の作成からとりかかった。

2) 研究2

最初に PAT の開発者より日本語版の作成の承諾を得た。原版の開発者より提示された Translation Guideline に則り、日本語版の翻訳プロセスをすすめ、日本語版原版を作成するとともに表面妥当性の検討を行った。2名のバイリンガルが独立して日本語に翻訳したものを、小児がん患者・家族にかかわる専門職者である別のバイリンガルと研究者が統合し、さらに異なる1名のバイリンガルにより英語に逆翻訳し、PAT 原版開発者のレビューを受けた。そこで指摘された点に関して、精神腫瘍医・緩和ケア医・小児科医・心理士・がん看護専門看護師・小児科エキスパートナース・チャイルドライフスペシャリストにフォーカス・グループ・インタビューなどで検討した。そのうえで、プレテストとして、7組の小児がん患者の家族に対してフォーカス・グループ・インタビューと個別面談を行い、PAT 日本語版原版に修正を加えた。最終的に原版の開発者から PAT 日本語版の承認を得られたため、現在は、計量心理学的に信頼性・妥当性を検討するための調査の準備をすすめているところである。

4. 今後の予定

各施設での IRB 審査において承認を得られしだい、順次、質問紙調査を開始していく予定である。2016年度はこれらのデータ収集および得られたデータの分析をすすめていくと同時に、PAT 日本語版を実際の臨床事例で活用し、臨床応用の可能性を検討していきたいと考えている。



この度は、私共の研究にご支援くださりまして、心より感謝申し上げます。2016年度は質問紙調査によるデータ収集と分析をさらに本格的にすすめていく予定です。2015年度の助成金の残額の繰り越し（助成金使用報告書参照）と2016年度の継続申請を希望いたします。